

農作物技術情報 第6号 野菜

発行日 平成29年 8月31日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

- ◆ 施設果菜類 気象条件に応じた温度・灌水管理の徹底を
- ◆ 露地きゅうり 草勢維持、摘葉と病害防除の徹底を
- ◆ 雨よけほうれんそう 適切な品種への切り替え、秋雨・台風への備えを万全に
- ◆ 露地葉茎根菜類 収穫率向上のための適切な管理と病虫害防除

1 生育概況

- (1) トマトの雨よけ栽培では、日照不足による草勢の低下や徒長が見られます。病虫害では灰色かび病に加え、葉かび病、かいよう病、オオタバコガ、コナジラミ類の発生も散見されます。
- (2) ピーマンでは施設、露地栽培とも、日照不足により草勢の低下が見られるほか、着色の遅れによる色白果や赤果の発生が見られます。病虫害ではタバコガと斑点病の発生が広く見られるほか、アブラムシ類、アザミウマ類、灰色かび病なども散見されます。
- (3) きゅうりの露地栽培は日照不足により草勢が弱く、果形が不良となっている圃場が多く見られます。また、病害では炭そ病とべと病が広く発生しているほか、褐斑病や黒星病などが見られています。害虫ではハダニ類やアブラムシ類などの発生が見られています。施設抑制栽培でも草勢が弱く、生育が遅れています。病虫害では一部でべと病やうどんこ病の発生が見られるものの、発生は多くありません。
- (4) 雨よけほうれんそうは、日照不足等の影響により軟弱徒長気味に生育している圃場が多く見られます。病虫害では、一部で萎凋病が発生しているほか、アブラムシ類、シロオビノメイガ、コナダニ類の発生が見られます。
- (5) 高冷地キャベツは、降雨や日照不足等の影響は少なく、概ね順調に出荷が続いています。降雨が続いたため、べと病、株腐病の発生が見られますが、被害は少なめです。高冷地レタスは、概ね順調に出荷が続いていますが、生育はやや停滞しており、べと病、斑点細菌病、軟腐病の発生が見られます。
- (6) ねぎは、夏どり作型の収穫が行われていますが、降雨の影響により、土寄せ等の管理作業が遅れる傾向にあります。病虫害は、黒斑病、葉枯病、べと病、さび病、小菌核病などが発生しており、一部で白絹病、軟腐病やアザミウマ類の被害が多く見られます。

2 技術対策

(1) 果菜類 (トマト・ピーマン)

ア 施設果菜類 (共通)

今後も気温の変動や急な豪雨などが懸念されますので、気象条件に応じた温度・灌水管理を徹底するとともに、大雨でも速やかに排水できるような事前準備をして下さい。また、今後秋雨前線が活発になるとハウス内の湿度が上がりますので、十分な換気を行うことと、病虫害の防除にはくん煙剤を使用する等、湿度を上げない工夫が必要です。

気温が低下してきたら、施設果菜類では夜間の保温を行います。

イ 雨よけトマト

裂果の発生を抑えるため、土壌水分の急激な変化を起こさないよう少量多回数の灌水管理とするとともに、ハウス外からの雨水の横浸透にも留意し、ハウス周囲の明渠の点検整備をしましょう。また、最低気温が14℃を下回るようになったら保温を行ってください。

最終摘心時期は収穫打ち切りの日から逆算して決めますが、10月末まで収穫する場合は、9月上旬頃が目安となります。開花花房の上の葉を2枚残して摘心すると、放任するよりも果実の肥大が良くなります。

病害では今後、灰色かび病や葉かび病、疫病の発生が懸念されるので、これら病害に効果のある薬剤を選択し、防除に努めてください。高温期に萎れが多く発生した圃場では、次年度対策のためにきちんと診断を受け、萎れの原因を確認しておきましょう。

ウ ピーマン

施設・露地とも気温の低下とともに赤果や黒変果の発生が増えてきます。ハウス栽培では最低気温16℃をめぐり保温を開始し、気象条件に応じて換気を行い、適切な温度管理に努めてください。

病害虫では、降雨後に軟腐病の発生が多くなる時期となります。軟腐病の予防には降雨前後の薬剤散布が効果的です。特に、タバコガの食害痕など傷の付いた部分から病原菌が侵入しますので、地域の予察情報等を参考にタバコガの防除もあわせて実施して下さい。罹病果を圃場に放置すると軟腐病の伝染源となりますので、速やかに圃場外で処分しましょう。

(2) 露地きゅうり

成り疲れや日照不足の影響で草勢が低下している圃場が見られることから、不良果の摘果に努めて草勢回復を図り、摘心はアーチの外側に飛び出しているところを指先で止める程度にとどめます。

摘葉は、生育後半でも太陽光がアーチ内部に十分入り込み、新葉が常に発生するように図1を参考に行います。

さらに、草勢回復には液肥を薄い倍率で葉面散布することも有効です。気温も徐々に低下してきますので、追肥は速効性の資材を利用するようにします。

病害では褐斑病、炭そ病、べと病に効果のある薬剤を中心に選択し、古葉や病葉の摘葉作業と併せながら効果的な防除に努めます。特に、アーチの上部で病害がまん延しないよう丁寧な薬剤散布に努めてください。

また、キュウリホモプシス根腐病に感染しているかどうかを判断するために、根の残渣診断をお勧めしています。収穫終了後、まだ軸が青いうちに診断する必要がありますので、気になる萎れが見られる場合は、最寄りの普及センターへご相談ください。

(3) 雨よけほうれんそう

秋まき作型品種への切り替え時期です。品種によっては、高温で徒長したり、気温の低下により生育が大幅に遅れる場合がありますので、天気予報等を参考にしながら各地域で示されている品種体系に従い、適期に播種しましょう。

気温の低下や秋雨の影響でハウスを閉める時間が長くなると、べと病が発生しやすくなります。抵抗性品種を利用している場合でも、日中は積極的に換気を行い、発生しにくい環境にしましょう。

ハウレンソウケナガコナダニやシロオビノメイガ等の害虫が発生しやすい時期になります。

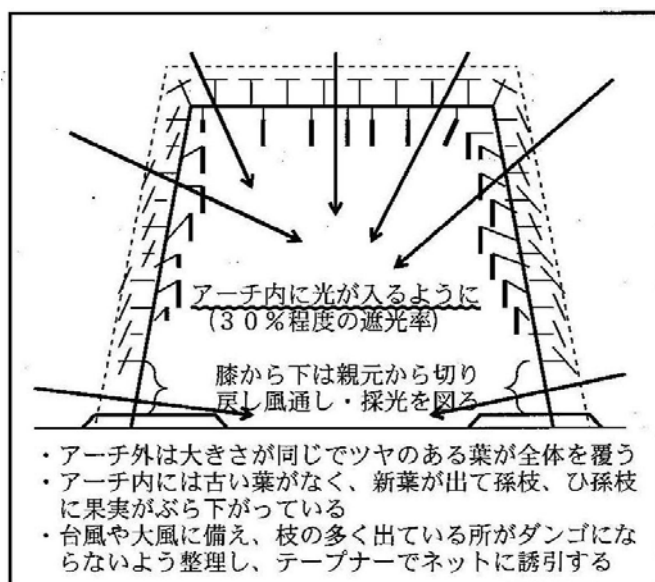


図1 露地きゅうり後半の管理ポイント

効果のある薬剤を適期に使用しましょう。

台風の影響を受けやすい時期になります。屋根ビニールが破損したり、ハウス内に雨水が流入するのを防止するため、ビニールの破れの補修、ハウス周りの排水対策を再度確認します。

(4) 露地葉菜類

ア ネギ

台風の影響を受けやすい時期になりますので、圃場に耐水しないよう排水対策を行うとともに、倒伏等の被害を減らすため、適期に土寄せを行います。

最終土寄せをした後の日数が長くなると葉鞘部のしまりが悪くなる等、品質が低下しますので、収穫の20～30日前を目安に最終培土を行います。

収穫が近くなってからの病虫害被害は品質の低下に直結しますので、早めの防除を心がけましょう。なお、農薬の使用にあたっては収穫前日数を確認して適切に防除しましょう。

イ キャベツ・レタス

高冷地の定植作業は概ね終了しています。今後は生育中の栽培管理をしっかり行い、適期収穫により収穫率の向上を目指しましょう。

大雨や長雨に備えて圃場排水を確認し、降雨後の防除を円滑に行えるようにしましょう。また、収穫終了後の廃棄株や残渣は放置せず、病虫害の発生源とならないように注意しましょう。

ウ アスパラガス

普通栽培および立茎栽培のアスパラガスは、地上の茎葉部に存在している養分が地下部へ徐々に移行する時期となります。これからの追肥は養分転流の妨げになりますので、行わないようにしましょう。次年度に向けた株養成には茎葉部を健全に保つことが重要ですので、倒伏防止対策をしている場合は、台風等に備えてもう一度ネットや誘引線の確認を行きましょう（写真1）。

促成アスパラガスの株養成においても、茎葉部を健全に保つことが収量向上につながります。病虫害防除を徹底し、倒伏させずに自然に茎葉が黄化するようにしましょう。



写真1
フラワーネット利用による
倒伏防止例

次号は9月28日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

中央農業改良普及センター・地域普及グループは、地域農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。